

職とことば 佐佐木定綱

生きるためには食べなければならぬ。パンがなければお菓子を食べてもいいけれど、お菓子を食べるためにもお金が必要だ。働かざる者食うべからず。生きるために人はあらゆる職業を生み出し、そして歌ってきた。

職業詠の強さをあらためて感じている。

・冬近し客呼びをする街角の娘たち上着一枚羽織る

・一年間生花置かれ続けたるガードレールに残る損傷

高山邦男『インソムニア』の一つの特徴は都会のタクシー運転手による現代の観察だ。客呼びをする娘たちの冬支度。幾度も見ているであろう光景の小さな差異を見逃さない。「娘たち上着」の字余りが羽織る上着の一枚の厚みを感じさせる。二首目、事故のあったガードレールとそこに置かれた花を見続けている。運転手を常にする人間として、事故というのは隣り合わせのものだろう。重い時間がある。

職業はその人の言語世界に多大な影響を与える。

人は目の前の世界をことばを通して見ている。という考え方がある。言語学者の鈴木孝夫は「世界の断片を、私たちが、ものとか性質として認識できるのは、ことばによってであり、ことばがなければ、犬も猫も区別できない」（『ことばと文化』）と言う。犬を犬と、猫を猫と名付け、そのことばを知っているから区別で

きるといのである。

ことばを通すとき、どのようなことばに普段接しているかが重要になる。知っていても普段使わなければ思い出すことはないし、そもそも知らなければ目の前にあっても見えない可能性がある。

たとえば、ツツジを知っている人は花が咲いているのを見て記憶にとどめるが、知らない人は花が咲いているなあぐらいで素通りしてしまふ、もしかしたら花が咲いていることすら気づかないかもしれない。僕は本屋にいるので本を見ると雑誌なのか書籍なのか、装丁はどうなのか、売られ方は……など店員の目線で見ることが、知らない人はまったく気にしないことだろう。

仕事によってその人のことばに力が掛かり、その人の世界の見え方まで変わってくる。

このことばによる世界を考えると、時田則雄を思い出す。

・野男の名刺すなはち冨と氷雨にさらせしてのひらの皮（『北方

論』）

・五百トン牛糞買ひぬ作付図D地六町歩ビートを植ゑむ

一首目、自らを野男であるという。もはや職業を越えた存在だ。厳しい自然がてのひらの皮に収斂してゆく。二首目、牛糞はトン単位で買いつけるものであるというだけで僕には衝撃だ。下手したら僕は牛糞を見ても牛糞とわからない。

職業詠を読むとき、力強さのようなものを感じていた。そこには肉体が経験した紛れもない実感があるからだろうと思っていたが、どうやらそれだけではなく、働くうちに掛かることばのバイアスがあり、それを通して世界が歌われているからというのもあるようだ。